あふこのくに白石なるふ山もんに馬瑙
のいろあるゝ代〻殿の山をうえもちをつゝあ
てはゝこつゝみ田畑もゝしゝねは
ふりつゝるゝ雨のいゝ白あさゝのうゝ
ふハ月ゝのなゝこけゝ遊ひてうんをぬきいゝ
うゝ雲ゝのうゝ利ふけゝを給ゝ清水
第ゝ品ゝ馬ゝ出せゝし霊をゝゝして其
器のゝゝしきに御ふものゝ地仙とゝゝ

そもそもわれらん世にうまれるをあるひおもほえず
そ文集の雖言葉をうけゝへくけうあさ程かう
につきてあらゝゝらうゝを覆うゝ初らそ人をも
そはふゝゝ人の此ゝるうえおゝゝうん實らを
ゝゝたかうよ出家い凡拙乃此さをゝ上ほ
さらしおのゝ何のいふへきゝ不もおもほえね
と禅のつゝけてんびを拙と同しくいうゝゝや
とおもふ不しゝとをすまをゝへをなな

一

ん況ようセ十の志ほふみちをゝおのゝゝゝふゝ
をおゝへを老の志を助へきゝるびをゝ小さん
かゝゝを傾く齢を遥ゝ路を宿てゝみえん
ゝふのゝゝゝ多を志ゝへゝ子里も清迫くおも
むきゝゝを儀を法山乃ゝうゝに記をゝしを
ゝゝ敢やゝゝを人ゝゝび墓ゝゝゝ
師と情を多ゝ行何法ゝハおの拙ゝゝひめと
をなゝしちゝをもおゝ人を決ゝゝ

まくらをとつまくれてまことの年老ぬる
なめるあるうち渭あるかもよしやとう
宮政十年のなつ弥生日一り
浪華老拙菅蹊黒田屋にて老人

吳國の姑蘇ハ敵豫文選のたくひをもひもとき文ゝの面
ゝの文を伊勢源氏のおうるまよまきうるん安
ゆゝ我ハ世俗るワさにつまたなるれい我の文のたをも
長ゝ人咋家の業なしまるる俳諧の食自を口
すちゝ人を言葉の行をもて文をもて自のた
夾けゝなをしも今ゝこそ文をも老ゝ志ゝてぬや
和夫を跡りしを徒志の病ふ粕されぬうゝ人
志のひて去留しびうゝ家の墓ゝ名仔を自ら

馬栗自序

碌菓亭の記

乾坤の間に変めるものいろ〳〵数仲本を記すて手ら名のさ
ちるハなきに手ら亭より名をあるさるを名ある法
に信りぬ事ハ法ゆの日さ所ハ〳〵よ者のたのしさ月の
ゆゑ〳〵事此亭〳〵実変来ぬれ〳〵名よ菓のこさて
むるに五碌肌骨清く六碌仙霊を通さるを覚ふ
ちれハ碌菓子と名付ぬ〳〵ハい、うに〳〵あれハそれ赤を
月出変名ある〳〵菓を信腸をあ〳〵ひてらを出よ
夫風雅の清味ある事今も昔も第さる人の嗜ひ
ものゝ古き器をいと笑ふ名を変やぬ事ある好
をも弱ハ夫〳〵ありのまゝなるをぬめハかゝ法変家に
打てつけ〳〵法名ある〳〵しく即時に碌菓子の三字
を菓盆の底ゆ書ゝて

古菓新菓いとさぬ客ゆ考てれん

吾名乃説

或人問て曰汝ら馬鹿ゝ〳〵ハい事の鹿さる拙や名て曰事
ら鹿をかゝ〳〵ゆ〳〵ゝて許由ら拝〳〵法るもあれさ

きありきて後世のためなる大宮せられもあれ
ましてさく花を前よりのぞ(ま)し巣をなるもたつす
いとまさるあきはいまさらしうをおさふるにはく(ま)て
も炎天は晒さるゝ千熱の憂をまぬかれしをよろこ
秋もやゝ更りは陰ひて肥やゝ毒素をかぬる程やく
屋のかさちいゝかりなるつも冬来ぬ(ま)い圍炉裏の
上の煙りむせひ十無乃しをを吐んとまれとる欲の苦
ミハ故小りあハれ木の葉衣の腰よ付られて吉凶初ほ
のむの下に捨んとおもふも千里の花りの弱を出して

杖嶋をし立の月の影よ吹りをんるもさる仙人の術
をなるハねハやんうるし法世の終をぬゝるゝ
あゝ押へつるしいしして老の果を涼のよたよけ
られんゝ思ひて
炭ゝなつて果てし我ぬゝ

鎮火の夕日

長根より降るさた高宮の社焼えすゝ消えけれハこハ
何るゝ立家るた畑のかゝ佛極ハ小松ひ田の中よ

神の初をうち来て一段あり或は橋杭は二布をつき長
風呂桶は釜をとりかこむ家ずゝあに火移るか
と刹那のうち一人の叫ぶあり雷鳴よりはさはし
急ぎ文をあらていさわ秋も結ぶの祈念ゆさんと
雲かくす鳥みな皆ゆ大乃勢し
于時天明三秋八月廿六日夜ふけてるる窓ちし

短冊帳の序

西行紙因の脚ゆあるゝよいかゝとより李白杜子の反ら眼も
あるゝ徒よかゝ山里ゆ月日をおくる保文し稀くに
討い来ゆ人あるゝ砂色のさゝし家の好
けよりおにあてなるゝ人ゆ使しなるゝ国ゝ北如ま
殺白を乞求て是を我あの長ものとるし風客を
てるゝ和ゝとんゝ山ゆ風をとゝかゝる詩しゝ行て
玉章を短冊ゆ書分の人ゝ
のなる和

牛を悼詞

ゝ湖東の馬流那ゆも

肖柏と牡丹の園にまさかりて本所八幡の宮の辺より牽引り
しもひしきすらる牛を牽引るのこゑ〳〵しるし（抵小
ふみけるさいもきあれとも家は農業の業にかまを
をやしるしあるけるを遠く木柴を負しる或日八
近き田畑に犂馬耙をちらをあさせもひるに至
八里のうまの貝を学て休むと知りタアハ寺の晩鐘を
学てうつうつ毛日の勤行しゝ笑うゝ人より先は
赤に塗るけこ堂アの豆腐を案をたまし物をもて
飯汁の給りを湯より飼桶へうつる寺をきゝてうま

やのか面は新さし延して食をふゝ人はあかゝれ
いと気なりうれ今年文月廿日より抜はいさく紙ひ出
しあれハ伯楽をやしむ茶を絞し針をあてう灸
の人来りて湯をたて足をあしひあをあてロを拭ゝ地
赤のうちは男女い衣を脱うゝ服をふて咽をさすふし
いゝもさる功もあゝて咲るうれうひに四の足を投出し
て平首うちしゝを引ん

骨おしゝ角ハ鹿尾毛竹の雫

雪人の説

雪燈窠ハ簾をかゝけ、綿し富士山ハうちいそんさ
ハと詠しのみしもむとよ雪を教の秀逸ゝゝ
雪のあゝをなゝを雪起といふ形をつくるハ雪仏とぬ
ゝを雪名と教か枝の時ハ花あゝ尓ゝ教を雪女ゝ尓
ゝ尓もいまゝ雪男ゝ尓名を雪ハ我ゝ尓ゝ雪人と
名ゝ尓ゝ雪ゝ人ハ赤人人麿呂の人ゝもあゝす盗人
人笑の人ゝも尓ゝてゝ生ゝ雪あゝの教の山人ゝて
詩仙奇のむつゝしきハ志ゝ尓ゝ俳諧の白を雪

詩に口吏さゝあゝさてつひまハ山陰の仙の系ゝ尓雪ぬ
ゝしえゝ雪ゝ尓ゝを安ゝ清ゝの訓ゝ我ゝ安ゝ清ゝを
ゝて尓山陰ゝ尓のゝ尓ゝを尓ゝ尓ゝ
鬢髭もやゝし白ゝ雪の人

俳前生花供書詞

某の年乃卯月八日ゝ尓日毎に俳ゝもゝるゝ尓ゝ日深
ゝ尓ゝて山木型仲の為ゝ尓ゝてゝ眼ゝ尓ゝ人ゝを俳ゝ
ゝて尓十ゝ年ゝ尓及ゝ尓ゝ尓ゝ供生ゝ尓ゝあゝ尓ゝ友ゝ

よ告て四季のむけ各をもしてもあくこれハ悔意
せ〜し日あ〜ハなそのの日数のをもつくのそんとあかりて
り来の光の流るまてと彩ハしく

有為や十年にあまる白義

長城後閑氏の不白紙うた

何のしの君より特弟や老ら口もも思ひ出れ其名をを
紙りおりけなるうしこく思ふるこまし花のまちのに
ハのれ公の法小可をそる遊ひしをとひ出し

紙へ乃ハ秋も上よる春ちしうら老てほ乃ち〜しるか
とこのりうるにさいなくて大仮吟ひの泄たそ、生る

ふな抜の夏ろも勝豆屑ろる

尾屋寺乃麓なる仲の小田ほりに志ちくもんのとめん
と紙をそて免ける侍乃ここの氏い知寺のちよ田をとるを
遊ひりるら彼海えの居る盗人の我日も殺りおひる
と人の名まるなこハいりたとなりこまい年若き大
男のいろ沿らせしもいろ彩利〜もみえて

文よ姉しきさまにもあらにあらをと又歌よ俳を
換き菜を調へ〳〵咲ふる三日四日に及ひしをまれ
盗しふをるのふる鳥丸屋の色紙すさい近衛家の
短冊あり手ふ世よ名〳〵ぬ人の出しい絵し画く
の毒ねハ数多きねを見けるりおきハもつけ夫用
度元数ハ用もやうにあ〳〵羅ふ為夫屋きふた
もあ〳〵ひ〳〵也出夫し〳〵

あ戸のるるかり夫む磯の浦ふ
よせてふ波のうひやなるうん　房子　国雨

なれと妻〳〵そ通よ〳〳ふい

我罪も消やは夫ふれや春の雪　白雄

雪との雪に重して日数ふるよ〳〵眠をふ一伝

匂ひをふ不れ花の仙人　馬場乙孤

読鼓苔むして鳥鳴ふれ〳〵う屋の松
う枝よ嘲るものあり何やらんとをかさし又歌年歌
反哺の孝よふのふ川菜ふれり静に繁ふた山里
の読ホ生かさふるを見ふ〳〵ふふの影よ菜化ふ変よ

まく世代の化のかはゆらふまて及てあんとをひて

ちひうをふ志ありてや 烏 乃 系

他力本願の仏の乃乃年々月々に度こりかゝ保奥山
里のちまて供養をつりの之度のいしそきさ小ハ
ひ高倍をむう〳〵まりて撞初の借書をなすしゝまふ
利そのあ〳〵爰清潔叶て章の中のさいをひとも
地の人〳〵ハ佐ゝまりのふさきゝさの人の母ゝ小ふても
法の思ひをせし眼ふんても法り毒ゝの親せゝを代

こに杖さゝる法の窟を役のふを加保老ゝ久も保ゝ
ありて

後の世の義も時よ義 乃 系

杖の説

地ゝ杖と羽杖とゝつけて仏乃のおも遠奥ゝ世ゝ卯
杖ハ神国のなゝらはしに子色のうゝハ〳〵きもゝしハ
十まて家とにゆゝさ保も産所の用の代ゝとなを保も
まゝそゝし息杖ハ小峯の系概ゝなゝれのとの頬杖や

豆腐の杖杖もゆうゝしきうゝあり藤とゝ八杖豆と一
の家よりなきゝ家のちゝ稽さたもつもひとゝまゝ杖のはゝあり
さゝしも宣嘱の侍杖を八人て有ゝ人の雑まゝてあゝ
ゝ杖の科ゝゝたつゝ法を切八甚ゝ姿るの白にゝし
めゝしゝなゝ木杖竹杖を市女撫又北方をゝけ者
もゝ杖八めゝし会仏に使ゝあゝ費長房ゝつゝ八孫ゝ化
ゝし弘光ゝ杖を豆寿杖ゝて来ゝ杖ゝゝ木ゝゝ市ゝ
此杖八御代留ゝゝ木ゝて芝ゝもてゝ丈木ゝ長
三尺ゝて堂のちゝい杖不に自然ゝを編のかゝち侍りて

突ゝ不意ゝもあゝ見や天のあゝかゝるまのゝゝら
ゝ長ゝゝゝゝて

老ゝ身の月かゝやゝ此を編杖

河原乃庵ゝ老ゝ法をゝこゝあゝ別荘を化ゝてゝ名
を嵐穴屋ゝゝ此をゝゝゝゝあゝゝゝの大嵐を風ふ
のためゝかの穴（這入のれゝゝ八猫の臺をのれゝ
這入てゝゝの鬱を保んゝゝ杖を実て向八戸くゝゝ
月影ゝ世のぬけ穴を付八ゝゝふ

蝸牛角里秋を偲文

団宮のるゝ秋も

まゝあたらしむる彩りもの盛をたのしゝ秋風吹
むるクアより月の秋以をまつよかるゝすしも風光の傳
あるハけ来のありさまかり今年もいとつゝに日数を
重ぬる百よ反科の回りも吉祝ゝ出もなくあるゝ
れりれハ明るあるゝ思ハるよひうゝれての吉祝も
知にさゝてゝ来りに親学ゝ思ハるの形絶せんゝ思ひて

粒り首逢をんとゝよゝ思ふ書やゝのり先をゝん
るしといふゝさゝ久ゝれん弱りてけもあるハ同り二人と
笠に来るゝまゝ和しゝと思ふ人ゝるれハひゝまゝゝ君を
ゝゝ絶まゝれあゝれ同しゝ心ゝに慈ゝ
秋永を等ゝ菩薩ゝいゝ年

ゝやゝゝも出ゝ涅槃不蝸牛

老ゝ足弱り頭をゝ糸ハ明ゝ年に疎菓子北屋を
ゝゝす蔵お一冊をよゝてハ忘れ来ゝてハよゝつもし

をとゝのれいはいよりてハ色ん狭くありてたゆく世をゑ
まゝ〳〵なる思ひ又ハ世俗を結ぶ和されてんをまゝハす日
もあるにたゝ〳〵ゝゝもある人の涙より毒の涙ハ竹ゝ子涙
へゝゝゝ鬱の九き飯あり竹を結ぶい糸ゝあかりしハ月も
に竹枕をゝ結ひをも思ひいゝゝしてゝゝ勢も生延る
ゝゝゝれハ

飯あ窓に起るゝゝ花の旅心

眼のゝの悲

人ゝ四十を老のむしゝゝゝゝして枯れよう六根六識の
ゝゝ月こに裏る況おの絶七十ゝ儀ゝてけゝゝ
ゝのゝ耳ハゝゝゝゝもあゝのおはゝゝゝ絶を通ん
足ハ弱ゝれゝ馬竹輿のたゝ失けあり目のゝゝさハ人の
ちゝゝゝゝ及ハさゝゝ何れの人ゝ絶り枯めゝん眼涙ゝ
ゝゝゝむのゝゝゝゝゝけゝられて蚤虱をはゝられゝゝ
離婁ゝ毫のゝも青砥ゝ涙も老の目にゝ絶あゝ足ゝ
涙ゝハひゝゝゝゝ玉の涙なり是を用ゝ毎ゝ載さ涙ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ此玉の恩ゝを忘ゝハ末世ハ浮木あゝ

海の青垣とせる夏しる

老らゑの月日とあく眠うゑ

まちの絵

くゝ記ゝさて行むけし時の表

行ゝしぬ神代の形やえ方　棚

ちゑのまちをむうゝて

芳すり赤ゑ稔ゝる　新　麦　好

蓋ゝうゝ色やゝ老ゝ赤ゝる　桜の肉

信濃の蓮華

出ぬやゝ　柔らためれ　倭仮名

御ぬやゝ半ゝ　いもゝ　麦米の飯

義ゝゝ花の　宮まち　麦ゑ信

戦ゝ日ゝ　わゝ半　春人

ゑナのまちをむうゝて

福寿草　志ひゝ　咲ゝ　高原

かゝ深ゝ　ゝて　桜の　ニ三輪

庭ゑゝ　桜のむひのお月さま

たるの雪大根ひくあたゝかな

雪をこゝの山やゝに積りぬ雪の雪

秋の数乃後のけうよおぼ河内

古井戸ひて藤ひて

古井戸ひて藤ひて

雪の数北東おもしろし東山

元禄の俳諧ゝセナの笑ゝ

蕎の芽や雪をはらひて見たれども

鶏の足ぬきして居る雪

函谷の関の戸たゝく鶏の声小ひくき宗宗

ゝ鶏ハ改道のゝ失けゝ雪しゝ

ぬき足ゝ雪ゝ蕎の芽歌ゝや雪の鶏

いさましき数ゝ雪ゝ紙ゝ

関ゝ鳥ゝ鳥ゝ紙ゝ黄ゝ

ほゝをゝて雪ゝ花

日高ゝや蝶の雪ゝ膝ゝ

たゝゝれて門ゝ女猫ゝ

雑ゝゝ人ゝ雑祭

大いなる蛙ひとつ出でたるの海

病中

病めるあれて京にて飯喰へ花盛
花盗人ありて海の道化うる
人ありて一つ出でぬ他のもてあそぶ
祝しき文を付れて

ありしは花の咲やとおらう
芦の文を作
ましや人花と海とを筆て後

夜むを分てて色る小笠原
遊君の函に
まちうけや色葉の筆も百面
昌浮の葬を送りて
京へ来て京人もものの附をけば
ほのかなる色てもよしあさみ
一畑をちれるあつかや祝文と嘆く
裏の歌
つきよげる日も朝日よりも懐

世の世事とこそ旅のこゝろなれ
ゆくとなるいつれうき人や福まちう
天令の機せきや年師考
憂年のつゆをよかしれ泉る日
いるをもとこゝ云いなを老の夏部小
蓬窓の雨れ今ふ寄や書ひし
卯のもや茶ふるてる福宜ゝ門

祖父の墓にて人のつくりし墓のあれやて

踏くつゝて山のてけまや苔のむ

川原なるゝ八尺えを牡丹うれ
山畑や芋よも胡蝶も似ゆえ

月川は京八幡十余年にて没しのふ所とセ

十に儀て山傳を悔む

志ゝるゝの歌きや示もけしのむ
ゆゝゝまれ記くゝ多抽ゝるゝゝが
叶鳥去ふ山やゝゝハ世れてれし
井のるや車やゝゝゝ及へ出ら

竹の扉は稿客あり生歌

客人有りて夢想の吉兆
なりとぞいふのく高や笠 稀
五月雨や名残惜しい水日
哀の月いつるも入るも あさが
ほや沼うつさるる朝もせん
まを梅雨 義太しりう 蛙半
秋水とあるかくれの園 あうん
ふんたらしてゆる星にのれ
暑さりや我よ支るる丸さ

源吉をよ賀して
一番の燈の高や声 のこよ
山蟬を清しさ夢をきくほさ
夕涼や儀一の義の信よ 咲
人の評より笑る半のこ乃ゆ
半ゆかるて
蟬をこつ尾もありて豆腐よ
荒ゆしあるよりるる
う見やしし郭と夕アに哀の富士

秋の部

袖もころも砧ぬれぬや女の子
すのもつくやうにあむや玉簾
稲妻と打合てとり服ぬる窓

愚父四十賀

ちとせしのりふの今日寿ちりを
郭郎や松ふるしかたらまほひ会
何者の杖のちからや蔓珠沙華
嶺松伝説のはしおのふきものあるに

寿を記夕アに寿の杖をはるよてきうて
一に菊月中の三日に選化しのひ茶ハ
師恩の深うけるこゝハさらかり松をしても
舎ゝあるゝをもゝ白ゝ
ちゝまゝ〳〵ゝ四ゝやをさうゝ虫の寿
伊勢の二ゝ伊ゝ扇を四ゝ

名月やこの海あてにいせ海
二ゝゝ
二ゝとはまゝ名ゝ海の月

名月や門に入しかの人
りうりん法してもよし月の秋

父母の戒名をかりて吉光に寄て

あきと秋年ぬまるや春の影御供

更科にて

けふし来や神さぶ今宵の月
加賀の国田毎の月の影
棟や名月御堂の足の裏
十六夜の国の海さも赤き月の石

此けふりやたのしき国も石の内
施しもさやさやき秋の彼うち
鈴虫や蓮華に寄る虫の形
志つかりし山も石つゝや秋の雨
秋の雨ちゝ吠れて犬繞後
鷲鳥舟ゝつゝあはしうの草の色
鶏頭や千年移の中の意志
母のゝ四月
已ゝてゝ乳ゝしてはかし移新

後閑氏の吾妻に詣でゝ一法を授かりて

自然芭蕉や世をすて住つる庵の夢

公の役をゆるされて

山雀や竜をけ輪ぬけ庭の松

懺悔の心

あるうらしまを物ものしく荒の春

赤畑を吟ふらもまゝに麻の春

白菓や老つゝしうる名を思

月にあうけてや梨の棚つくり

ある竹の房に記しき友の含ひとつまつの

枕をなぶてゆるぬ郭起出るしきあ白あ

人人を起さしと無しして

三つ栗の中うの花ぬけてゆのうる

初茸や京へや活すり喰て住へ

茸狩や一ぬを濃り合

〻〻〻形もも祝を今年系

関寺の公の春や秋の春

幻阿法師の遺像示て

つひ[illegible]れし[illegible]ぬや苔の生うつし

[illegible]の詠

世を嘆て炉に苔をさゝ[illegible]

國分山の初住寺をゝしけ

祝[illegible]し坂のすゑつゝや雲のむ

釣[illegible]のゆうゝる一し雲乃[illegible]

初雪や崇[illegible]れものいさきの

笠の紐ゝとゝやゝ[illegible]の客

馬市や小[illegible]ゝ雪の上

ゝひゝゝおけゝ寄かゝ[illegible]の雪

[illegible]の杖をおゝて[illegible]

是小便人うつまん[illegible]雪の杖

雪[illegible]や儀へ遠き中と[illegible]

瓦あゝま叩いてゝれな玉あふ

四方かゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

よのゝゝく[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

自業自得

燃もせてひゝり[illegible]や炭仄

古寿云爭寿嵐の第ヨ呂ん
言さ物や一一書鈴と云しさん
布袋和尚の袋の口ゝゝる画
ゑ深ゝ伝へ蔵ん和尚様
木うゝしやさゝゝてもあれる事のゝ
菖の葉やゝうゝゝもつゝて枯ゝ
拙るの枯うのやしけやゆりを
大枯りちのゝゝあゝまてあけんん
掛もの事ゝゝゝゝ出らつちれて根

年内立春
むとゝる事その答とゝしの内
大きゝや一同しのすゝ拝
ある歌の本体ヨ拝ひて
大名にあるつゝさゝとおゝゝゝ云
年云待て出ゝ歌世間法
ゝゝ云あゝゝ懺悔の嘆ゝん
お の傳ゝゝえゝゝ神足を拝て
りゝゝ欲ゝゝゝと云ゝ

我師除歳の六日まで文おくりなひしら山世の
かさしとふらるる
あしたゆふへよるんるゆの雪の文
ひしゆのおもひし村と埴里のぬしに捧ぐ
月雪に念仏やをよ子代の杖
天台大師千三百遠忌に
法の波ゆはさしぬ知るべの雫ぬ

悲の歌

我年ゆ西国順礼のゆさしあるもせのうたかはるふて
彼よりとよりくもや老まきいそやをよの春ふをとらいさ
ためて誠立ひをめ月をしめなりうる友人よりおるして
然世界の春ひんてゆるてもの友
世山の雪ひとゆいて土山のうゆやにいそを仲来の人生
ゆう皇うしうしいて足もかろくんいさまし
春さきを待廉を清し雨あるを
伊勢の道夫のうハ日ハ月ゆるれるおるれと春の旅の色

はるしきんぐれあやまはの四天王寺に芭蕉翁の文塚あり
はるかにちぐの二りはの松塚もありて翁の面影さいも雨
ひとつれりかくきんとまるをりはふれいはしん人とハの時の色きか
とに帝うは一の文のたしにういつけしかうとにハ夫ろに
涙おちを

かくきたるものとなりや春の月

ゑとは日ゝを経て内外の神にぬうつきまり山田の四友和とふ
人を訪ひふれい病の床ちらをひ出ゝ初後夫さたいと
あつらしくて

ふるりハぬるりと起と菜の苗
と徒しゝ田九海をよりはかたちうくうれ新ふうて
八鬼山やゝにに咸さるもの霧
嵯峨のうれハ熊野浦に帆ふんくとしてよ船百船のり
ふさま目もあやうおれよりに日るて有馬村とふ里の芦
儀にもの山ゐるとふあり伊勢伊特諸伊特冊のうの蕪ふと
ゐるるもにかふふちゆふと光像の詠しぬしし八日
の本の祭の初ゑより市代のまるも記をしはし
とふしるゑ一よゑの俳よう岩ゑうれ

三里ばかりなれい新宮の社まうつ実も神さびていと尊
し本殿にはくまの十二の王子の社あり
阿弥陀や　王子くの宮たふと
四方てはあたに蔡の徐福の不老あらはふ天國より此國へ
ふるふ此の菓とりに来りしと人うり今の蔡氏の祖とかや
百姓の茅葺やほのぼうし流
二里ばかりいい三輪ゝ崎とふ村をすぎて恰登朝臣の海人
等の宿をりそむらしを思ひて
形勢浦や眺にもつむ月の色

天満とふ所に国ゝまの神の由緒とふ所を訪ひて
ゆのしさに百里もをし浦の春
たふとうとおもへば篠葉の杖由又
一枝お清ちんゝを取のひれゝりをこんせさりれをの
きて出ぬるにけふ形勢の浦ハ二里ばかりもあるさよう
みるさと義るあゝ四十丈にあるれらるん
雲ゝ引ゝ子ゝ乃乃浦の中をたつ
ふを出て十日あまりに帰路一番の新世界にぬうまて
ゝ新や　れうち地を久て　孤ん

玉垣を大宮とゝ山にりそてあやしの石ゝを求む
まふたゝ玉こたうもあゝ山ぢやう秋夜ゝ月ぬ小ハれとりあ
屋し枕よ高てゐ稲もやゝれ夫旅の男さのゝ小屋夫ゝ業を
川かゝて一枝を吹夫俊ゝた山里のまゝらの彩のかやゝよゝ
ゝ多ゝる秋の夕月秋ざゝ芳の人の泊しぬゝしに姿ハ四ゝ
てんゝを玉ゝの祭の宵宮ゝ知ゝ出ゝ弓ゝ引ゝ出ゝ玉ゝ
ゝしを

清ゝ宮を拝ゝ後森うゝれ
吹を待ゝひてゝゝゝゝ本宮の社ゝぬゝゝゝゝゝにゝゝれ

宮殿ゝ焼ゝ焼ゝせぬとて供たゝの竹のゝたゝくゝゝゝ
玉垣の名のゝゝあむもゝゝ泊ゝ
今いむゝゝ音長は泊ゝゝゝゝゝ人の此宮の焼ゝの跡ゝ
たのゝしゝみかゝても泊ゝ跡ゝあて世ゝとゝ夫ゝ外のゝゝ
ゝ泊しぬゝゝ地ゝのゝゝゝ天神白川法皇の此ゝ
ゝゝゝゝ式部の墓ゝあゝ巡ゝて泊の心ゝ秋

裸元に敷ゝゝ泊ゝゝ泊ゝの白ゝ
田ゝ泊ゝを夫ゝゝ道成寺にゝゝ安珠の塚蛇塚法楽
の跡ゝゝあり

ふきけもと分さるや　女足

とりひ捨て戻代路を越て和哥浦につえを曳て

　　月に晴むもま男るや　玉津嶋

大和路に出るまて卿日を経て三輪明神にまうて山のふもとすまる

まかきん出へてしし二本の杉衣掛の杉ましてあり

　　色りもなるる凡中の川糸やや三輪の山

談田の社に夕かけてまのるは此神のつかハしめとや多く鶏の

祢くるみたかさまての木々の枝たちもくろうに

　　油り鶏をもの説も也や談田山

持れとり再の多のもるくをあくまうふまかくさん又た旧都みれハ

名所古跡ハいふもさらなり又なる我かおもに流まて奈つかし

かくぬもハなかし猿沢の池まのそえて

　　兎ともの影てのくきは川菜め

井出の里に蛙も啼さりけれハ手ふもロを閉て通りぬ宇治の

名所を見く床扇の芝も其の草青くそう槙の中の間路そ

経うして

　　君か代か宇治川ものは菜つみ哉

急角して石山まうとあふてるさかより高里の山も見へわかれ

ふいのもとのいとりてはやうるもたうめし栗はの義

仲秋の名塚をなんと立寄ハ赤の老ゆも三河の風朱寺へ

まゐるなんとてあたりの手ゝはきらくゆりしをいとゝ

寺の名所流うをはなをちん蝶爰

是のをゝれよ遊ふ赤ゝ日ゝ乙鳥

梅ハ爰 桐ゝまゝき鳥 帰て 沂風

沢に庵の墨白ひ ゝの 筆に

旅のれゝをあゝめてうつゝ須磨ゝ格ゝ三ハ秋の月の如

以ゝとゝを涼しゝて赤に沖ゝ後のゝのしゝゝ

國くの風さゝゝよ 云 この へ

月の順禮

秋の暑さも例年ゝ過きぬ小春巡り球をし教世寺に

れ仏んと細脛をこゝかけてゝゝくしゝを出るゝゝ

十四ゝ ゝ 月の抜け侯ゝを目南や 八日立

赤里近き町名村の名宮ゝ赤に立ゝゝ小ゝ族のゝゝく赤

る人ゝて何赤ゝゝ屋しもいゝと新毎し新ゝゝに活てくつ

ゝ赤く明れのゝゝをゝけんゝゝいのゝゝゝゝて櫨の竹園梨

を讃めたれば傍もかたるの氏文をうちとりて之のと祝もふ
にあはせしめふかとうく長命ちにまゐりて水茎の岡の辺を
搦船よりあがりて江戸といふ村に泊る九日京に入三条に泊る
十日ゑ石鉢菴を訪ふ老僧の餞のとて
ゑとしの氏の吉野初瀬の山くを見ん
この秋江戸桂之の浦くをたのうかんと出立
りゐ八月末の頃れとも色さる熟をのこ
の旅のよ我ほひをえて
蓑すてゝ月之の旅の人 嵯峨

松島山の秋かりそめ

そ秋八月清涼に泊る十一日ゑ宮山へのぼりた住の國亀山の城下を
ゑりて宍太寺へ泊つ反畑といふ山里ゑ右うんとふしをもと
免あるけとも夫けるとも右うゑ久敷に入るかの吾家ちて此
扉のお面よりあゝて禁廉に泊る十二日栗生の光明寺ゑまゐる
国光大師の庆塚とゆかりの
ゆりあゝかへうおうしや庵の塚
はの國の古号鈴の金沢寺にをり山寺のまのりゑ来て元
れハ入おのうゑに京をちりゑと紙国法師の泊しめし

し桃の木れ下に立ちてうゑ枯しとゝて

幾秋の苔はまさるかゝる桃の木

とてこゝの所に書分め別ておりふれはよる花の井とよあり四

法師の足曳の山下れに影ふれハ眉さらさらよ赤にろと

深しめし井ろ〳〵し桃の木の所ハ寛宗寺といふ寺

とゝ二町ばかりの所のすにある盤木生ちけりゝ中に深き

秋の月新田立ち塚の木い

總持寺をあし郡山といふ所に海ナ二日ハ勝屋寺に泊つ

多光大ゆめ三ゝ泊まりておりたしいと泊まりてあるて秋を

ちの眞田の滝に向へハ日ゝ〳〵ちり赤ち天をあゝ江田を

通りて下戸ちをあを田ハ男ハよりけれとゝりの泊をかゝしけるも

いとゝ中山まてまりあいてゝ花山の法皇とゝ宮ゝ

ひとゝ〳〵ハ流れ者ハ三熊ゝ〳〵ゝ拾ひとゝてゝ

宝塔と変えていとゝ西の宮の石ゝ海ナ四日ハあの西天阪

の社をあゝ一陸投てあるものねしをるすもをゝし摩耶山にの

る山の険しき変ふ色くもあゝし赤ち入ゝ絵りしあるゝ

えの坂をゝて布川の滝まり

秋風に吹やちくける滝の水

生田の社にまうでゝ寿永のいくさに平家の大将軍忠盛の
神恒の梅ふさをゝれて籠にさしてこゝにまうでゝ今に
籠のうへとゝふありこれは梅氏の祈をもとて

稲妻や呼吸を入れを表入せ

そなのはれ清盛の石塔をあしし所ゝの里に沖てるの光り
ゆゝあの海たゝに月の光りうゝいて波ゝるのもとゝし
後の山れのことりうるよりはひい沖なくもあゝ沖平の月入
のれうゝふあうゝまて月れうゝてよちのうゝぬゝに光
源氏の山清ゝり平ふのひゝしゝて雨ゝ影ゝつゝてゝ

月影や島帽るゝ波おゝ足いれ
ゝ源浦里も世てふれてやサしゝ今光流ゝ流ゝ
人ゝよてひゝしに廣ゝ所ゝ廣ゝの月

十五日夕ゝまゝ廣ゝ所ゝ廣ゝ寺ゝて寶物をあんゝまれ八月れの今
夕日のゝゝやうたゝし出ゝと告れ八ゝあ所ゝ海のゝに沖に
日ゝ影の三社ゝれうゝセゝまゝとゝ面やゝまぬれ八倒の一社ゝゝ
ゝまゝまゝ老の眼のうゝゝ沖なゝん一ゝ谷の古戦場ゝて
矢ゝけゝもたゝ吹く谷の奥
穀盛の墓ゝ向ひゝ

糸世やかくは墓なりた　蜑かある也

舞子か濱を見て明石の浦の柿本の社にまうつ

あけほのゝ霧たちこむる浦遠の帆

それより加古川の駅にいたり山寺村の扉を叩て

補陀落の外にも月のれさゝる

と越て高砂のほとりの月見せんと尾上に泊る

名月や尾上のうらも底光り

十六日高砂の布舟より人をやとひ乗れは熊への渡りとて宿
石の寶殿曾根の松をたつねて姫路の城下にいたり六宿へ馬を
頼み晩景の白あり翌書写山にのほりてあらんと森に
宿りて。

十六夜や闇淺うつる山の上

え来りし坂をおりて泊る十七日法華山にまうて仕保の社と
いふ所に泊る十八日此國の清水寺にまゐる夫れより山深く分け今
よしろと山中に一夜をあかし十九日も小ぐらき谷川をつたひて
日を重ね廿日八丹後の國に出て外宮内宮にまうつ今は宮社
の数をいそれはひとしく神さひてたゝすもしにん宮兮

露さひし社中も深や　款子　禰宜

宮津の城下に泊る百尾馬吹の両士を訪ひして投足うて閑談す

月に来てうれしき友ゝ咄しの夜　之

ましらつ波に明る秋の投　百尾

六一日小船ようち乗り与謝の海を逍遥して

橋立や虹引ちる沢松への笠

久世戸の文殊を拝して成相山にのほる此寺ハ観音の道の
ふところにて遠く見えておもしろき眺也ましき宮津の方へ戻りて栗田といふ所
より七曲り八峠といふを越して三荘太夫か居跡の跡といふを見て

て　油木の下や茱の木わくての宿

田邊と云ふ所の宿に泊る此投ハ放下仲とおなし趣にして

肌さむき糸を吞なる放下哉

廿二日若狭の松の尾寺にまうて須賀いよ本郷といふ村に泊る
順礼ハ袖乞せされハ観世音の利益見へさりしと嘗て安心と面恥
かしをえ東順礼の日頃きさへ進りれハいそや今宵ハなし宿て
裏門へ入てねし鳴て門口に立て鞍掛をとへハまけるといふてお
それすて須の家に乞へハ麦の挽かしを施しける又のふにハ茶を
わたこ天是て輩足の蛇を捨也を頭陀の袋へ入て泊りの宿へ福
ろき秋風にやあかしらんれてさうしおる挽物を鉢の粥にかしきて

観世寺に侍ふ法花堂に参りて小淚の橋下につく八百比丘尼の
像をおがみ鵜川を渡て近江の海に入て今はの浦に泊る
しるべ船渡すとき仮あしの八三日枕よりて日をおくる廿六日
非生鳴る浦の波れの人々渡てこゆる事多し中に時に
開帳の杉のうら葉の合せて時雨の音を聞す
そるされ目に立つ浦のあらしかな
都良香の立ちとまりてしくて又舟に乗て尾上を以浦里
につきて高田の去何ゝ所は海を背の庵の庵の
古きよりしたしきものか

杉母るれ実色ゝ紅葉 庵の松
吹ゝに惜しき俤の残つる 去何

廿七日馬渡村の青柳ゝ所まで去ゆ足遠ゝ事思ひ入
駅とりて伊吹山を色ゝ見ゆ赤坂の茅戸ゝ泊る

月出ゝ影いろゝしれ秋あん 茅戸
ふしの長野に芳しきか

廿八日谷汲まにまゐる老ゝ八鬢の白髮をぬきゝ八象の
黒髮とさゝきてつくゝ八おゝ有ゝ同行一蓮院生
ゝ

行末を四しし芋茎中雨と露
三十三所に遥拝をなしてゑ来の影ひ成就せんことをこひて
ゑ遥ゝ八天明六丙午秋九月一日人既信徒の友とあつめて
馬瓢綴

絶筆記

白鹿資中尸の様ふ馬瓢皮ありて若きよりの風雅の友に
たゝれ月雪にんをゆゝしくして常に世を免命即滅必如
小児衆新有何樂とおもひとりて六十の齢にいたりゑを

想観のをりこに懐ゆてこゝの身を直ちに不生ワさと
求るこもあゝて彩の侍りのおもをかゝよせて一図窓を
ひゝさ捻石禅師ゝ幾度開窓看蒼月の一句を記
恵し右に芭蕉翁の肖像をあゝの左に少き棚を
かゝへ中にゝろくえを安置し後ゝ文ひつをあけて茶の
黄ゝ茶にんをゝらい風流の道ゝり佛の在るも入魂きを
さゝしてゝものゝあゝれをおもいゝるに永源禅寺の知
識のをしへゝまゝゝて法華経を一石に一字ゝ写ゝ終り
ゝろ七世に納て志ゝ生ぬ魂の菩提の夏往ゝ孔ゝ

して石を建てうきて法東知恩院の主　定誉大僧
正に六字の名号を授けまいらせられしが其の秋や
浄土へ去る程つねとなく白くして捧げたまふ法の次
おほしてゐるまでもあれば馬瓢の京のほのぼのとさあ
へしと宣ひしうえおのれ文をもてかくと知らせられみ
登蓮法師の明日の命もたのまれぬといひしをおもひ
てやとまるものもなりあへば國を出でやうて法よりよりあひて
叢原でもとまるやうをの義項山と語し発句を高徳に
伝ひるにはとまるの花ちるはと宣ひてもとし法師の

法師に戸の師の自画賛の布袋の号の一紙あり拙に
各白出家よりと宣ふを年をとりて名はとりの足
月日に世界を跡を伝へられしとく俳諧
の真加よりふへるとんとくの毒足のつゝみもたゝれ
ぬるれるとうきを御物語に修行の原を押てもて
きたりしに拙も信力悟進して日数念仏おはすゝ
つとめしとなんるとし法堂のころあの老人とくもにつら
白鹿をやりの法令にまゝてけれ何とやらんの恋し
てたれかしてねいつちの花さいあられいおの花とそう

なるまゝに打よりて薬をつくり人保ひしにより是ひや
うにあわれに煙を開きてあゝ免まゝをしに視をも
いて今らあらかしあさ京の此身これと思てつし
りる爰皆るるひらちに泊らんとゆゆしく驚ようい
のせて送り給せ三日四日をてやんよくおさし
れいおのれも晩ヤてこゝやこたのかのりるさ保は文月十二
日より回爰法師の法ようを修をこしてひるさ人るたる迄
六日まを為るる次とて知識を請し後の世の用ををし
ゝ人告こしるに聚るこれてあるやとおも(そと遥ま

道を満られはせんうさゝ佛前に向ひ除後正念の祈
願を終るよりおるしき夜の夏に老人らの荘にい
たりてやのうさを伺ふに爰面おはしきやたに
てありいるれはかゝ所面あらん所のあゝ向たあハ西方を
ねむにとりありて寿ゝれし髪をかきあけ西
をあけて遠きをいとりて久しくも寄れしおやう
泥しられ示はあひ極系に多ハとて爰の秋秋も
むらしの人とゝ保とゝ多つたれのれいゝ保後の世此用
ゝさ記極ちう急にも角にもあさ未来おや大るるれ

とまりしかの法をしたとへあなにぬれてをりん
萩の庵にて笠に拓をつきそふ
夫れにも山もとやうの月影にはらはらしたるとて
引つきのしぬをおはえて爰ハ見えぬ物なれば遠に
庵を隔てれもんこのえハ子里も遠しといふす
ひとしきをれの間をはさむ四ふるしやうても
白を月下に去るしてて縣史の仲に送れ去るしき
かきりおよりアンておハいうるさしまと地に伏て
佛神に祈誓まとりくとと更に去るしる十首と

りに睡うめく注生して東岱の嫩と立のりの小邦
の家に居まるしる訃吉のりるに胸ものりて今さる此誓
べきにハあるれもまを初にあるをもくやしさ人おるる
歌ふに立ちとまりりる嗚呼此人今の世に生
れて上技の人やいとまを人まを程知ぬるの人やいふ
べき事の立ヲと見東れれれと流歩のあるまし
浪東萬頃山におるる如風書

維貞享和改元幸酉初秋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五升蒔五八全

蕉門書林　皇都寺町通二條
橘屋治兵衛梓